

〈論文〉川端康成『雪国』：その世界と視点 人物についての考察

梅澤，亜由美 / ウメザワ，アユミ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

46

(開始ページ / Start Page)

50

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

1992-12-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019653>

川端康成『雪国』

——その世界と視点人物についての考察——

梅 澤 亜 由 美

日本における一九二〇年代は、「現代都市の成立」の時期であった。急激なる都市化の中で人々の生活はもちろん、都市に住む人々も変化を遂げる。そんな時代の流れの中で、文学においては都市を題材とした「都市小説」が流行する。この時期、谷崎や堀辰雄なども都市小説を書いていた。そしてまた川端も、『浅草紅団』を代表とする「浅草もの」と言われる都市小説を書いていった。しかしその後、作家達は都市離れをはじめた。谷崎は日本の伝統美を求め、関西へと辿り着く。堀辰雄は神経の安まる田園を求め、軽井沢へと辿り着く。

では、川端は都市から離れた後、どこへ行ったのだろうか。そこで川端の『浅草紅団』以後を追ってみると、一連の「浅草もの」の直後には『雪国』がある。もう少し詳しく解説すると、川端の一連の「浅草もの」の最後は『浅草紅団』の続編である『浅草祭』である。この『浅草祭』は一九三四年（昭和九年）九月から『文藝』に連載されはじめ、翌年の三月（最終回のみ

『文學界』に掲載）に全六回で終了している。そして『浅草祭』の文芸誌上の連載がまだ終了していない同じ年の一月には、『雪国』冒頭の初出である『夕景色の鏡』がすでに『文藝春秋』に掲載されているということになる。

川端は都市から雪国へ行ったわけであるが、その川端の後を作品から追う際、重要となってくるのは視点人物の存在である。

『浅草紅団』において、川端のつくり出したのは「架空の小説家」である「私」という人物であった。「私」は気ままな「都市の遊歩者」であり、都市の中で弓子という一人の少女を追いかけていた。弓子は混乱する都市の中で、自分自身をも混乱させてしまった少女であった。弓子は混乱から逃れるために必死に行動していた。そんな弓子を「私」は追いかけて続けているのだが、何もしてやることはできない。「私」はみつめるだけの人であったのだ。この作品は未完であるのだがこのまま

書きつがれても、弓子は都市の中で増々混乱し自己を崩壊させていく結果となったであろう。川端はそれを予測し、作品を書き続ける意欲を失ってしまったのではないだろうか。かつて川端が愛した浅草の中には、都市と化した浅草の中に閉じ込められてしまった少女がいた。その後『浅草祭』において都市そのものに対しても幻滅を感じた川端は、都市を離れ雪国へと向かったのであった。そして川端が次につくり出したのは、『島村』という人物であった。『浅草紅団』が「架空の小説家」である「私」の目を通して弓子の物語として読むことができるように、『雪国』もまた島村の目を通して駒子の物語として読むことができる。『浅草紅団』の「私」も『雪国』の島村も、単なる視点人物にすぎないという読みである。『浅草紅団』の「私」はともかく、『雪国』の島村については実際そのような説が多い。しかし私が読む限りにおいては『浅草紅団』の「私」は視点人物の域を出ていないが、『雪国』の島村は視点人物でありながらもそれを越えた役割を持っていると思えるのだ。そしてまた島村がそのような役割を果たす時、『浅草紅団』の「私」も『浅草紅団』だけでは見えて来なかった役割が見えて来るのではないだろうか。

その答えを見つけるには、『雪国』の世界へ入ってみなければならないだろう。

『雪国』は、島村の三度の雪国への訪問が書かれている。(しかし実際に雪が降っているのは二度めの訪問の時だけであ

る。)これを小説内の時間的叙述に従って見てみると島村の二度めの訪問から物語がはじまり、その間に回想の形で一度めの訪問の話が挿入されている。その後再び二度めの訪問の話に戻り、三度めの訪問へと時間の流れに従って書かれている。三度の雪国訪問のうち一度めの訪問の話は、「君はあの時、ああ言っていたけれども、あれはやつぱり嘘だよ。さうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。」という島村の言葉のすぐ後にはじまっている。そして回想のあと再び小説内部での現在に戻る時の島村の言葉は、「君はあの時、ああ言っていたけれども、あれはやつぱり嘘だよ。そうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。後でも笑やしなかったよ。」である。要するに一度めの訪問の話は「後でも笑やしなかったよ。」という言葉が付け足されているが、同じ台詞の間に挿入されているのだ。一度めの訪問の話は「君はあの時、ああ言つてた」の内容を明らかにするために挿入され、その内容は付け足された「後でも笑やしなかったよ。」からもわかるように、「あんた笑つてゐるわね。私を笑つてゐるわね。」／「笑つてやしない。」／「心の底で笑つてゐるでせう。今笑つてなくても、きつと後で笑ふわ。」といった駒子と島村のやりとりであろう。この駒子の台詞は後の場面でも繰り返される。またプレオリジナル版ではこのような形をとっていない。そのことから考えてもこの一度めの訪問の二人のやりとりは、作品の中で大きな意味を持っているということが出来る。——がやはり一度めの訪問の話は、二度め・三度めの訪問の話ほどは作品に大

きな影響を与えていないだろう。ここでは作品の叙述と同様に一度めの訪問は二度目の訪問に包み込んで考え、二度目の訪問と三度目の訪問に焦点をあてて考えていく。島村の二度目の訪問と三度目の訪問とを大きく考える時、二つの訪問の間の最も大きな変化は何だろうか。もちろん島村が「その度毎に駒子の境遇の變つてゐること」を思ったように、駒子には幾つかの変化がある。しかしそういった駒子の変化をも含めた最も大きな変化は「行男の死」なのではないだろうか。この「行男の死」に重点を与えると、作品内部での島村の役割にも影響があるのではないだろうか。つまり二度目の訪問において島村は、主に駒子をではあるが、駒子・行男・葉子の奇妙な関係を眺める視点人物としての色が濃い。しかし行男が死んでしまった三度目の訪問においては、島村の役割は視点人物を越えて来ているように考えられるのである。更にこの『雪国』という作品は数年を経て書きつがれたのだが、書きつがれた部分ほど作品の中の島村の役割は大きくなっているという気がする。『雪国』という作品は最終的にはやはり、「島村」という人物に大きな意味があるはずである。

では、更に細かく作品を読んでいこう。

『雪国』という作品には、駒子の「あんた笑つてゐるわね。」「あんた私の氣持分る?」「東京の人は嘘つきだから嫌ひ。」など繰り返し登場するキーワードがある。そして「徒労」という言葉もまたその一つである。この「徒労」は、『雪国』プレオ

リジナルの段階での表題の一つでもある。駒子の日記、小説の雑誌、島村が感じる駒子の徒労は幾つもある。しかし中でも島村が最も強く「徒労」だと感じたのは、「行男のこと」であろう。駒子の一番古い日記の一番初めには、「東京へ行く時、行男がたった一人見送ってくれたこと」が書かれている。そして行男の死が迫った時、駒子は「日記なんかもうつけられない。焼いてしまふ。」と言う。行男と別れる時書きはじめられ、行男の死の間際「もうつけられな」くなる駒子の日記。その日記には、おそらく駒子の行男への思いが書き綴られているのだろう。しかし駒子の行男への思いはいまや「徒労」にすぎない。そこに「葉子」という存在が出現したからだ。葉子の出現により駒子の思いは行き場を失い、「徒労」となってしまったのだ。そしてここには「東京」が絡んでいる。この駒子の最大の徒労——駒子・行男・葉子の三人の關係の背後には、「東京」の存在が常に見え隠れしているのだ。

『雪国』という作品において「東京」という土地は常に見え隠れしている。東京から遠く離れた雪国の温泉場でのこの物語の後ろには、常に「東京」が存在しているのだ。まずこの作品の主要人物を「島村・駒子・葉子・行男」とする時、東京からの旅行者である島村はもちろん、駒子・葉子・行男の三人も皆、東京で暮らしたことがある人々、東京帰りの人々なのである。『雪国』に見える東京をもう少し詳しく見てみよう。

駒子・行男・葉子の三人の關係の背後に「東京」があるが、その中心に存在しているのは行男である。行男は母と駒子のい

る雪国を離れ、東京の夜学に通っていたが体の無理が重なり病気になる。そして故郷に死に帰って来る。行男と駒子は幼なじみであるが、いわずくではないと言う。二人の間には正式な約束はなかったのだろう。しかし、二人とも惹かれ合っただけに違いない。ところが行男の帰郷には、まるで夫婦でもあるかのようにこまめに世話を焼く葉子が付き添って来る。行男と葉子がそれ以前この雪国において、面識があったのかどうかはわからない。しかしほぼ確実に言えることは、二人は「東京」で現在のような関係になったのである。行男が東京で勉強を、葉子が看護婦をしていて彼等は惹かれ合うようになったのであろう。雪国での行男は駒子を愛し、東京での行男は葉子を愛する。行男にとってはどちらも真実なのであろう。そしてまた、死んでいく彼にとってはどちらも成就しない愛なのだ。それ故に、行男は葉子を付き添わせて雪国に戻って来る事ができたのであろう。最早死んでいく行男にとっては、どちらの愛も真実であり、かつまたどうにもできないものである。故に決着をつける必要もない。しかし行男を見送る二人の女——駒子と葉子にとっては、行男は一人であり、たとえ死んでいく人であっても、お互いの存在をすっぱり認め切ることはできない。死に行く人を安心して旅立たせようとする故に、二人は正面からお互いに対立するようなことはしない。しかし二人の心の底には、どうすることもできない蟠りがあるはずである。

行男を中心にして三人の関係をとらえると、葉子は東京の女

である。葉子は島村に「私も東京へ行きますわ。」と言い、帰る時に「連れて帰って下さい。」とも言ふ。葉子には肉親は弟一人であるらしい。しかし葉子はもともと村の娘であり、たった一人の弟は雪国の鉄道で働いているのである。ましてこの雪国には大切な行男の墓がある。にもかかわらず、葉子はなんのあてもない「東京」へ行くと言う。なぜ葉子は「東京」へ行こうとするのだろうか。葉子は以前は東京で看護婦をしていたが、看護婦にはもうならないと言っている。理由は「私は一人の人しか看護しない」からであり、その一人の人の看護は「もう出来」ないからである。一途な葉子は、「一生のうちに、外の病人を世話することも、外の人の墓に参ることも、もうないと思つてゐるのか？」という島村の質問に、きっぱりと「ないわ。」と答える。葉子と行男は「東京」ではじまった。葉子は行男を深く愛している。そんな葉子にとっては、東京の行男も雪国の行男も変わらぬ愛しい人のはずであった。ところが雪国には、駒子という存在があった。雪国での行男には、芸者にまで出て療養費を送ったという駒子の影が常に付きまとう。葉子は駒子を「可愛想なんですから、よくしてあげて下さい。」と島村に頼む。が、その半面東京に行くことを「駒ちゃんに憎いから言はないんです。」と言う。葉子の中では駒子は可愛想でありながらも、やはり恋敵である。そんな駒子に葉子はやはり憎しみを感ぜずにはいられない。まして駒子は自分の一途さに対して、「気持ちがひになる」と言つたのである。もちろんこの言葉は、駒子の自分自身の体験から得た葉子への思いやり故の

忠告である。しかし葉子にはそんなことは解らない。葉子にとつての行男は、「雪国での行男」ではなく、やはり「東京での行男」なのである。だから葉子は故郷を離れても、行男の墓を見捨てても東京へ行こうとするのである。葉子は行男を自分だけの愛する人として思い出を抱き続ける、そのために「東京」へ行くのである。

駒子の後ろにも「東京」が存在している。しかし駒子の東京は、行男や葉子の後ろにある東京よりも少し詳しく見る必要があるだろう。駒子の東京は島村の訪問の度毎に変化が見られる。それを追って行く必要があるのだが、その前に島村の訪問に合わせた駒子の境遇の変化をつかんでおきたい。

島村が「その三年足らずの間に三度来たが、その度に駒子の境遇の変つてゐること」を思ったように、駒子の境遇は少しずつ変化している。どのように変化しているのかを考えてみると――半玉で受け出された駒子は島村の一度めの訪問の時、「大きい宴会などには時たま頼まれて行くこともある」素人の娘であつた。二度めの訪問の時は、行男の療養費を稼ぐために芸者となつていた。そして三度めの訪問の時は、行男の母である師匠が死んだために家を変つて「ほんたうの置屋」に移つていた。順に変化を追ってみると、駒子が徐々に「商売女」としての色が濃くなってゆくのがわかる。更に三度めの訪問の際の駒子が家を変つた点については、もう少し考えてみる必要がある。駒子は師匠が病気の頃、実家へ行つていたと言う。そして

駒子は今も言っている。「実家へ行く時は、また商売に出るなんて夢にも思はなく、スキイも人にくれて行つちやつたのに、出来たことと言へば、煙草を止めただけだわ。」と。駒子はこの後「四年」勤めなければならぬということも後の会話からわかる。駒子は実家へ行く時、「また商売に出るなんて夢にも思はな」かつたのだ。もともと駒子が商売に出たのは、行男の療養費を稼ぐためである。その行男が死んでしまつたのだから駒子はもう商売をする必要もない。事実、駒子もそのつもりであつたようである。それなのになぜ、駒子はあと四年商売に出なければならぬのだろうか。作品を読んだ上だけでその理由を考えると、行男の母である「師匠の死」に突き当たる。行男とその母の師匠が相次いで死んでしまつたために、駒子は彼等の療養費・葬儀費用などを肩代わりしなければならなくなつたのではないだろうか。駒子は「行男」によつて、どんどん「商売女」になつてゆくのだ。

駒子は「境遇の許す範囲で、これでも私、きれいに暮したいとは思つてゐるんですよ。」と言ひ、島村に「あんた私の気持分る？」と詰め寄る。駒子が島村に「私の気持分る」と詰め寄る場面は他にも何回かある。前にも触れたことだが、駒子は「自分を笑われること」をひどく恐れている。そして「笑われること」を恐れるのと同じくらい自分の気持ちをわかつてもらいたがつている。駒子が笑われたくないし、わかつてもらいたくないとは何だろうか。作品中駒子が島村に「あんた私を笑つてたのね。やつぱり笑つてらしたのね。」と詰問し、激しく涙にく

れて「くやしい、ああつ、くやしい。」という場面がある。この場面が駒子が自分を笑われたことに對して最も感情的になる場面であろう。プレオリジナル版の段階ではこの場面はなく、改稿の後書き加えられた場面である。そのことから考えても、この場面には大きなポイントがあると言えるだろう。

ここから駒子はなぜ自分を笑われたと思ったのかを考えてみると、その前にある駒子と島村の会話が思い当たる。駒子は島村に「君はいい女だね。」「いい女だよ。」と言われ、最初は「肩がくすぐつたさうに顔を隠し」ていたのに、突然「それどういふ意味？　ねえ、なんのこと？」と島村を問い詰めはじめるのだ。そして「言つて頂戴。それで通つてらしたの？　あんな私を笑つてたのね。やつぱり笑つてらしたのね。」という駒子の台詞が続いている。駒子は島村に「いい女だ」と言われて怒つたことになるのだが、その少し後にはこう書かれている。「島村は駒子の聞きちがひに思ひあたると、はつと胸を突かれたけれど、目を閉ぢて黙つてゐた。」——と。駒子は「いい女」という意味を聞き違へたらしいのだが、どう聞き違へたのかは今一つわからない。駒子がどう聞き違へたのかを知るために、『雪国』のプレオリジナル版より『夕景色の鏡』の一節を引用する。

少し長くなつてしまふが、

「彼女はまだ水商売が身にしみてゐるわけでなし、多くの男を知つてゐるわけでもないが、まだ十六、七の頃に、自分がどんなにいい女であるかを、男から囁んでふくめるやうに教

えられ、その時はそれを喜ぶどころか、恥ぢるばかりだと、男はいよいよむきになつて褒めちぎつたので、やがて男の云ふことが彼女の頭の底に宿命のやうに沈みついてしまつたのだつた。けれども、それが彼女自身ではつきりと分るやうになつた後まで、天刑をあばかれたやうな初めの悲しみは消え残つてゐるのだつた。余りに早く愛なくして知つたためであつたらう。」

という部分である。島村は駒子の「身体」ではなく、駒子という女の存在そのものに対して「いい女」だと言つたのだらう。しかし駒子には過去の「恥ずべきだと感じていた記憶」が残つていたために、その言葉を自分の「身体」に対してだけに向けられたものだと思へてしまつたのである。

駒子は「境遇の許す範囲」「きれいに暮したい」と思つていふと言ふ。そして島村と初めて関係を持った時も、しきりに「さういふ女ぢやない。私はさういふ女ぢやないの。」と繰り返す。駒子は「商売女」である。しかし行男に對しても島村に對しても、彼女の思ひはいつも純粹なものなのである。島村から見れば「徒勞」に見えることも、駒子にとっては「真面目なこと」なのだ。そんな駒子は商売女のくせにと思われ、自分の純粹な思ひを笑われることは最も耐え難いことなのだらう。これは駒子という女の本質的な性質である。だからこそ作品の中でも二度めの訪問に一度めの訪問が工夫を施した形で挿入され、「笑う」ということが強調されているのだらう。また駒子は自分のそんな気持ちを誰かにわかつてもらいたいと思つて

いる。彼女は自分の気持ちに島村にならわかってもらえると考
えている。そしてまた葉子も、島村みたいな人の手にかかれば
気持ちがいらなくなるとも言えないと言う。

ここで、ではなぜ島村なのかという点が問題になるわけであ
るが、それはまた後で考えることにする。先に、先程からの問
題である駒子の「東京」について考えてみよう。

駒子の境遇は島村の訪問の度毎に変化しているわけだが、駒
子にとっての「東京」も少しずつ変化している。島村の一度め
の訪問の時、駒子は歌舞伎の俳優の芸風や消息について夢中で
しゃべった。東京で暮らしたことのある駒子には、まだそういつ
た「都会趣味」が残っている。しかしこの雪国にはそんな趣味
のわかる話相手はいない。そこに現れた「東京の人」島村は、
駒子にとって、まず話のできる相手であつたに違いない。作品
中少し後ろの方——島村の二度めの訪問の場面にも、「百九十
九日前のあの時も、かういふ話に夢中になつたことが、自ら進
んで島村に身を投げかけてゆくはずとなつたのも忘れてか」
という表現がある。このように駒子の島村への気持ちには、最
初は「東京の人」という意識が強く働いている。また「東京」
は、駒子が心の底で思っていた行男がいる土地なのだ。この頃
の駒子にとって、「東京」はまだ捨て切れぬ憧れの土地なのだ
ろう。

島村が二度めに訪問した時も、駒子は「見もしない映画や芝
居の話を、楽しげにしやべるのだつた」。それを見て島村は
「どういふ都会的なものへのあこがれ」も、今は「素直なあき

らめ」に包まれた「單純な徒勞の感」が強いものだと感じる。
そしてその少し後で、駒子は島村に「心にもないこと。東京の
人は嘘つきだから嫌ひ。」と言う。この駒子の台詞は、全く同
じものが後にもう一度（島村の三度めの訪問の時であるが）出
て来る。駒子の中で「東京」は微妙に変化していることがわか
る。では駒子の心境に変化を与えた要因は何だろうか。そこで
思いあたるのは、「東京」から雪国へ帰郷して来た行男の存在
である。駒子は心の底ではいつも行男を思い続けていた。そし
て芸者にまで出て療養費を送り続ける。駒子は島村に、芸者に
出て二カ月たった頃神経衰弱になつた話をする。この神経衰弱
の原因も多くは行男にあるに違いない。しかしその行男は葉子
という別の女に看護されながら戻つて来る。駒子が言う「嘘つ
きな東京の人」とは行男を暗示しているのである。駒子からし
てみれば東京が行男を変えてしまつたのであるであらう。華や
かな文化の中心であり愛する人のいる憧れの「東京」も、愛す
る人に裏切られた駒子にとってはもはや「あきらめ」でしかな
い。このように駒子・行男・葉子の三人の關係は雪国の中で展
開されながらも、「東京」によつて創られたものなのだ。

しかし、ここに新しく、東京を背負う男・島村が駒子の前に
出現する。その時駒子の中の「東京」はもう少し複雑である。

『雪国』において、島村という存在が後半にいく程大きくな
っているのではないか——ということについては先にも少し触
れた通りである。そして駒子にとっての島村もだんだん重い存
在となつていく。行男が死んでしまつた後の島村の三度めの雪

国訪問、この時駒子の島村への思いはいよいよ募っている。先にも触れたが、駒子は再び島村に「心にもないこと。東京の人は嘘つきだから嫌ひ。」と言う。ここで駒子は島村の二度めの訪問の時と同じ台詞を言っているわけであるが、この三度めの訪問には、次のような駒子と島村のやりとりがある。島村が駒子に行男の墓を見に行こうと言い出し駒子がムキになって反対する、そんな二人のやりとりの後である。

「ねえ、あんた素直な人ね。なにか悲しいんでせう。」

「木の上で子供が見てるよ。」

「分らないわ、東京の人は複雑で。あたりが騒々しいから、気が散るのね。」

「なにもかも散つちやつてるよ。」

「今に命まで散らすわよ。墓を見に行きませうか。」

ここで駒子が「命まで散らす」と言っているのは、もちろん行男のことをふまえてのことである。駒子の言っていることを整理すると「東京はあたりが騒々しいために、東京の人は気が散って複雑になってしまう」ということになる。そうして命まで散らしてしまった行男に対し、駒子はやり切れない思いが残っているのだろう。やはり駒子は、行男の裏切り・行男の死を「東京」のせいに行っているのだ。

ところでこの二人のやりとりにはもう一つ重要なところがある。「ねえ、あんた素直な人ね。なにか悲しいんでせう。」という駒子の台詞である。駒子が自分を笑われることを恐れていること、自分をわかってもらいたがっていることは先にも述べた

通りだ。駒子は焼いてから死ぬという日記を島村になら見せても良いと言っている。その際の駒子の台詞は「ねえ、あんた素直な人ね。素直な人なら、私の日記をすっかり送ってあげていいわ。あんた私を笑はないわね。あんた素直な人だと思ふけれど。」というものだ。「素直な人」である島村ならば駒子の徒労を笑わないし、その後ろにある純粹な気持ちがあると駒子は思っているのだ。そしてその「素直な東京の人」は「なにか悲しい」と感じている人なのだ。これは島村に言わせると「なにもかも散つちやつてるよ。」ということになる。この一言はかなり重要である。駒子が島村を好きな理由はここにあるのだが、駒子は葉子のことを島村に頼もうとしている。駒子が葉子を島村みたいな人（「素直な人」）の手にかかれば、気持ちがいにならなくてもすむかもしれないと考えていることは先にも書いた。更に駒子はこんなことも言っている。「あの子があなたの傍で可愛がられてると思つて、私はこの山のなかで身を持ち崩すの。しいんという気持ち。」——。葉子は行男の思い出がある「東京」へ行きたがっている。しかし逆に駒子はこの雪国で身を持ち崩すことを夢想している。しかも葉子を島村に連れて行かせて、一人淋しく雪国に埋もれていくことをだ。このことについて考えるために、先に駒子は——なぜ葉子が気持ちがいになると思ふのか、また行末自分の辛い荷物になりそうな気がするののか、について述べておく。

葉子の気持ちがいいに対して駒子の神経衰弱が思い浮かぶ。駒子は六月に芸者に出て八月に神経衰弱になるのだが、自分で「気

ちがひになるかと心配だつたわ。なにか一生懸命に思ひつめて
るんだけど、なにを思ひつめてるか、自分によく分らない
の。恐いでせう。」と言っている。駒子が神経衰弱になつてし
まったのは、おそらく行男の病状を心配して、また行男への純
粋な思いとその行男のために商売に出なければならぬ自分
——そういったことを思いつめすぎてしまったからであろう。

駒子は島村に「ほんとうに人を好きになれるのは、もう女だけ
なんですから。」と言う。これは自分や葉子をふまえてのこと
だろう。しかし本当に人を好きになり一途に思ひつめると気が
ちがってしまうのだ。駒子は自分自身の体験から、葉子は行男
を思いすぎて気持ちがいになると感じているのだ。そして同じ男
を思い、自分に似ている葉子を駒子は見捨てることなどできな
い。駒子は葉子を救つてやりたいと思つている。そしてそのた
めには、「あんたと離れるのはいわ。」と自分でも思つている
島村に任せるのが一番だと考へているのだ。駒子は島村に葉子
を連れて行かせたい。駒子にとって葉子は「理想の自分」、現
実においてそうはなれないがそう在りたい姿なのだ。行男が病
に倒れた時、駒子は雪国で芸者となり療養費を送つた。しかし
駒子が本当に望んでいたのは、葉子がそうしていたような「手
厚い看護」だつたはずである。駒子は「雪国」にいながらも、
心の中では「東京」に飛んでいきたかつたのではないだろう
か。葉子が「東京」で行男の看病をし、その死の後にも一途に思
ひ続けている間、駒子は「雪国」で少しづつ身を持ち崩し商売
女へとなつていく。

そして前述の駒子の台詞だ。「あの子があんたの傍で可愛が
られてると思つて、私はこの山のなかで身を持ち崩すの。しい
んという気持ち。」駒子が行男の次に好きになつたのは「東京の
人」島村であつた。島村は騒々しく複雑な東京で「なにもかも
散つ」てしまつている人物である。駒子は不可能とわかつてい
ながらも、心のどこかで島村について東京へ行きたいと考へて
いる。そしてそんな気持ちを自分の理想を生きている葉子に託
そうとする。愛する人はまたもや、「東京」へ行つてしまふ。
そしてその愛する人に着いて行くのは（葉子は実際に島村に着
いていくわけではないが）、自分ではなく「捨てなければなら
なかつた自分」のような別の女である。駒子は東京で葉子が島
村に可愛がられるのを思いながら、自分は雪国で身を持ち崩す
ことを望んでいる。何という淋しい光景だろう。駒子は自分自
身のことは、何もかもあきらめてゐるのだ。駒子は島村と同
様、しかし「雪国」で「なにもかも散つ」てしまつた女なの
だ。またそれ故に島村を愛するのだ。駒子は愛する人が東京へ
去つた後雪国で一人静かに暮らし、一人静かに「命まで散ら
す」時を待つのかもしれない。駒子は「雪国」に閉じ込められ
た、「雪国に呪縛された」女なのだ。

以上、『雪国』における「東京」・「駒子」について主に述べ
て来た。次には「なぜ島村なのか」、「島村とはどういう人物
なのか」を考へることにする。島村が視点人物であることは確
かだ。しかし前にも述べたように島村の存在は作品が進むにつ

れて大きくなっている。もう少し詳しく言うと、視点人物である島村という存在が視点人物として重要となっていく。そして最後にはそれ以上の意味を持つ存在となる、ということになるだろうか。

島村は純粋な「東京の人」である。作品中の主要人物達は皆、東京を背負ってはいる。しかし島村以外は雪国で生まれた人達である。純粋な東京の人である島村は、自ら言うように「なにもかも散つ」てしまっている人間である。駒子の言葉に少しあるが、東京はあたりが騒々しく人の気を散らせる場所なのである。『雪国』において東京の状況が窺えるのはその一節ぐらいである。しかし冒頭でも述べたように、一九二〇年代は現代都市成立の時代であり、都市小説流行の時代であった。そして川端も都市小説を書いていた。川端の『浅草紅団』は、都市の混乱の中で自分をも混乱させてしまった少女の話である。急激なる都市化は、そのスピード感・あわただしさなどにより人の心を病ませる。島村の心もまたそうである。彼はなにもかも散ったあきらめを常に感じている。そのあきらめをどうすることもできないとわかっていながら、一方ではどうにかしたいという気持ちも「素直な人」である島村の中にはある。駒子が島村に惹かれるのも、あきらめを抱き続けながらも素直に生きたいと思う——同じ気持ちを島村に感じているからであろう。島村はそんな状態から逃れるために、都市生活という現実から逃れようとしている。言わば、島村は「都市からの逃避者」なのだ。島村は最初は都市から逃れ、非現実の世界へと入り込む

ために「雪国」へと吸い寄せられている。一度めの訪問は偶然かもしれないが、二度めの訪問では心の底で非現実の世界を求めているのである。そしてそれを象徴するかのようには、「国境の長いトンネル」を抜けると「雪国」の世界が広がって来るのだ。(三度めの訪問は「天の河の世界」である。)そこで島村は文字通り「視点人物」として、雪国を、駒子をじっと見つめている。そしてじっと見つめるだけであつた島村に、徐々に見えて来たものがあつたのだ。それは都市から逃避して来た島村を、今度は雪国から立ち去らせるようなものであつた。

島村は、雪国に呪縛された駒子をどうしてやることもできない。そしてそんな自分に虚しさを感じている。あきらめや虚しさに包まれた都市生活から逃れ非現実の世界へ入り込んだはずが、その世界にもやはり現実・あきらめが存在していたのだ。また雪国には葉子という存在があつた。葉子は自分に素直に、また駒子の理想を生きているかのような少女である。葉子は島村や駒子のようにあきらめて生きてはいない。島村はそんな葉子に「無心に刺し透す光に似た目」を感じている。葉子は自分の思いに素直に、行男の思い出のある東京へ行こうとしている。しかし葉子が東京へ行くということは、葉子自身が行男の思い出に埋没することであり、これから先の人生をあきらめて生きていくことである。結局ここにも、「あきらめ」が存在しているのである。そんな状態を見つめながらも、島村は駒子との別離、雪国からの旅立ちをまだ踏み切れずにいる。

そんな時最後の事件が起こる。「雪中火事」と言われる『雪

『国』のラストシーンだ。火事を目撃する前、島村は「天の河」の美しさに感動している。「見上げてゐると天の河はまたこの大地を抱こうとしておりて来ると思へる。」——自然の力が大地を、現実・非現実を含めた世界を包み込もうとしているのだ。島村は無意識のうちにその自然の力に圧倒されている。そしてその自然の力に触れた後、火事に遭遇する。焼け落ちる繭倉から女の体が落ちる。それを見て島村は「非現実的な世界の幻影」のようだと感じる。自然の力の下でそれは些細なことにしか見えなかったのかもしれない。しかし次の瞬間、島村は現実に引き戻される。落ちた女が葉子であることがわかり、駒子の叫びが島村の身うちを貫く。その時島村は「葉子の内生命が變形する、その移り目のやうなもの」を感じる。島村や駒子から見れば自分の意志で生きている葉子が、自分の意志以外の力によって變形するのである。それはある意味では虚しい光景であつたのかもしれない。——がその時の島村にとっては、それさえも自然の力に近いものに感じられたのではないだろうか。しかし同時に島村は、葉子を抱きかかえ「この子、気がちがふわ。気がちがふわ。」と言う駒子の姿をも見る。駒子は自分の分身であるかのような葉子が、自分の身代わりにそうなつてしまった、葉子を救つてやることができなかつたと思つてしまったのだらう。そんな駒子が島村には、「自分の犠牲か刑罰かを抱いてゐるやうに」見える。何という虚しい光景であつたことだらうか。雪国で何もかもあきらめた虚しい女が、自分の希望の破片であつたもう一人の虚しい女を抱きかかえているのであ

る。しかしやはり島村にはどうすることもできないのだ。島村は自身のあきらめの世界である都市から逃れ、非現実的な雪国の世界を求めたはずであつた。しかしそこで島村が見たものは、東京に散つた男を巡る三角関係と東京を背負いながら雪国に埋もれていこうとする女であつた。都市から逃避してきただけの彼は、美しい非現実の世界だけを見ていることはできなかったのである。更に、悲しい現実には彼が逃げて来たばかりの東京の影がつきまとつていた。島村の逃避行動には意味がなかったのである。島村は最早、雪国を立ち去らなければならぬ。そんな島村は自分の中へ天の河が「さあ」と音を立てて流れ落ちるやうに感じる。この結末は一体何を物語っているのだらう。いずれにしても、島村は雪国を立ち去つて行くだろう。その際島村の中にあるものは、これから対する希望だろうか、絶望だろうか。島村が雪国で最後に見たのは、これ以上はないとも言える虚しい光景であつた。それを考えると、島村は更なる絶望を秘めて雪国を離れて行くということになる。しかしこの落ちて来る天の河を考える時、旅立ちには失意のみではないだらう。そこには全てを圧倒し、包み込んでしまうやうな「自然の力」がある。島村を雪国から旅立たせるものは、虚しい光景であつたのも確かだ。しかしまた、天の河の力であつたことも確かであらう。更なる絶望を見てしまった島村ではあるが、今度はそういつたものを超越したものを感じたのだ。島村の雪国からの旅立ちには微かでも光が差し込んでゐるはずだ。島村の二度めの訪問の時そこは真の「雪国」であり、そこ

には東京を背負った三人の男女の悲しい関係があった。島村はそれをじっと見つめているだけであつた。しかし今回三度めの訪問からの旅立ちには、同じ雪国ではあるが雪のない「天の河の世界」からの旅立ちなのだ。島村は最早見つめるだけの人ではなく、自ら次の世界を目指す人となつたのだ。次に島村は何を目指すのだろう。それはまだわからないが、彼は一先ず東京という現実に戻って行くのだろう。

以上のように『雪国』における島村を考える時、『浅草紅団』の「私」の役割も見えて来る。二つの作品の視点人物を考え合わせる時、次のようなことが言えるのではないだろうか。

『浅草紅団』において「都市の遊歩者」であつた「私」は、

『雪国』において「都市の逃避者」島村となつて現れる。都市において「都市に呪縛された少女」を見た見つめる人は、次に「雪国」に辿り着く。彼がそこで見たのは「雪国に呪縛された女」であつた。都市を遊歩し、都市から逃避して来た彼は、今度は雪国から旅立つ。都市においても雪国においても、彼は自分ではどうしてやることもできない「呪縛された女」を見た。彼は見つめるだけでどうすることもできず、虚しさを感じるのみである。都市からの逃避行動も無意味だったのだ。そんな彼は雪国で「自然の力」を感じる。彼は都市からの逃避者であつた。しかし、雪国からは「旅立つ」のだ。見つめるだけの虚しさを認識すると同時に、「自然の力」を感じた彼は次にどこで何を目指すのだろう。いずれにしても彼が次に目指すものは、

虚しさだけではなく「自然の力」を感じることでできるもののはずである。

『浅草紅団』における「私」と『雪国』の島村は同一人物ではない。まして川端自身ではない。二人は異なる境遇と性質を持つ、作者・川端が創造した人物である。しかし二つの作品を考え合わせる時浮かびあがつて来る視点人物は、やはり作者・川端の目と限りなく近い人物なのではないだろうか。作家達の都市離れという状況の中で、川端も都市という病んだ現実から逃れ美しい非現実の世界を求めた。そして雪国へ行った。しかし彼はそこに留まることなく、すぐに雪国をも後にしてしまつた。川端はまた次のものを求めて行く。次に彼の見るものには、島村が感じた「自然の力」がどこかにあるはずである。川端がその後どのような作品を書きそれを表現するのか、また彼はどこを目指すのか、私もまた後を追わねばならない。

(うめざわ あゆみ・大学院修士課程一年)